

論 説

チャールズ・テイラーとハンガリー事件 (1956-1957) (1)

梅 川 佳 子

目次

はじめに

第1節 テイラーのハンガリー難民支援活動

- (1) 最後の銃撃
- (2) 難民の発生
- (3) テイラーの難民支援活動
- (4) 難民に対するテイラーの懐疑と受容

第2節 スターリニズム批判

- (1) スターリニズムの不条理
- (2) ライク裁判に対する批判
- (3) モスクワ裁判に対する批判 (以上、本号掲載)

第3節 市民の自由と民主主義

- (1) 市民による自由のための活動
- (2) 経済と政治の民主主義
- (3) 「自由なハンガリー」像
- (4) 冷戦構造からの脱却

第4節 テイラーの人道主義と政治哲学

- (1) 人道主義
- (2) 政治哲学と道徳

おわりに

はじめに

本稿の目的と意義

チャールズ・テイラー Charles Taylor は 1931 年に誕生し、本年（2014 年）には 83 歳になる。すでに 25 冊以上の政治哲学に関する著書を出版し、300 本を超える論文を著している。彼は、今になってみれば、世界的な政治哲学者なのであるが、その研究を推進させた動機を形成してきたものは、マーク・レッドヘッド Mark Redhead やニコラス・スミス Nicholas H. Smith が述べているように¹⁾、同時代の政治に対する、彼の深刻な問題関心と実践的な関与である。

現実政治に対するテイラーの洞察と実践的な活動は、近年に至るまで継続しているが、とりわけ顕著であったのは、彼の青年のころである。ところが、これまでの先行研究では、主として 1970 年代以降のテイラーの政治哲学については比較的よく研究されてきたが、青年期の実践活動および思想形成については、国内外ともに、あまり研究されてこなかった。しかしテイラーの政治哲学を理解するためには、その原点、すなわち彼を政治哲学へと駆り立てた原動力を研究する必要がある。

筆者は、テイラーの問題関心と政治実践を理解することによって彼の政治哲学の意味を解き明かしていこうとしており、本稿はその最初の作業である。テイラーの最初の政治的実践がハンガリー難民支援であったので²⁾、本稿はこれを取りあげる。

本稿の目的は、テイラーが、1956 年にハンガリーから避難した難民を支援する際に、どのような活動を行い、何を感じたのかを明らかにすることである。

そこで、本稿が、テイラーの政治思想研究のためとはいえ、まずは彼のハンガリー難民支援という政治的実践について論じることにはどのような意義があるのか、この点についてさらに説明しておく。

1) Mark Redhead, *Charles Taylor: Thinking and Living Deep Diversity*, Rowman & Littlefield Publishers, 2002 ; Nicholas H. Smith, *Charles Taylor*, Polity Press, 2002.

2) なお、テイラーは、ハンガリー難民支援を行うよりも前から、核兵器反対の運動をしていた。彼は、すでにオックスフォード大学の学部学生であった 1954 年に、水素爆弾禁止を求める最初の活動を開始している。この点については、別稿で論じる予定である。

マーク・レッドヘッドは、2002年に『チャールズ・テイラー（深い多様性について思索し、その中を生きる）』（*Charles Taylor: Thinking and Living Deep Diversity*）³⁾を出版した。レッドヘッドによれば、テイラーは「政治哲学者であると同時に政治の実践者」であった。だから、テイラーについての研究傾向は、第1に彼の政治哲学そのものの研究と、第2に、政治的な実践と政治哲学の両面についての総合的研究に分けられる。

第1の傾向である、テイラー政治哲学そのものの研究は、西欧において「数えきれないほど」行われてきたという。例えばテイラーの「アトミズム批判」について、あるいは「近代のアイデンティティ」について、さらに「承認の政治」について、多くの論文が書かれてきた。

しかし、第2の研究傾向であるところの、テイラーの政治的な実践と政治哲学の両面についての総合的な研究は、西欧においてもガイ・ラフォレスト Guy Laforest のみが行っているにすぎないという。

ところがラフォレストも、テイラーの諸論文を編集して『割拠を和解させる（カナダの連邦主義とナショナリズムについての諸論文）』（*Reconciling the Solitudes: Essays in Canadian Federalism and Nationalism*）⁴⁾を出版し、この本にテイラーの政治家としての経歴を中心に紹介した序文を付け加えるにとどまっておき、テイラーの政治実践と政治哲学の関係のあり方を探求するうえであまり大きな成果をもたらしたものではない。

そこでレッドヘッドは、自らこの研究傾向を開拓しなければならないとして、2002年に前掲書を出版した。この著作は、テイラーが、カナダに帰国したのちの「新民主党」（New Democratic Party）副党首として、または連邦議員候補者として政治活動をするなかで、深い多様性を総合していくための彼の政治哲学をどのように構築したのかを論じている。

しかし、レッドヘッドも、テイラーがカナダに帰国して以降の時代、すなわち1961年以降の政治思想と政治的な実践の関係を研究しているのであって、それ以前のテイラーのニューレフト運動との関係やハンガ

3) Mark Redhead, *op.cit.*

4) Charles Taylor, *Reconciling the Solitudes: Essays in Canadian Federalism and Nationalism*, Guy Laforest (ed), McGill-Queen's University Press, 1993.

リー難民支援を扱っているわけではない。

たしかに 2002 年に、ニコラス・スミスは『チャールズ・テイラー（意味、道徳、近代）』（*Charles Taylor: Meaning, Morals and Modernity*）の中で、テイラーが青年時代にニューレフトの運動をして、「社会批判」（*Social Criticism*）の政治哲学を形成したことを簡単に示唆している⁵⁾。しかしこれも本格的な議論ではないし、ニューレフト以前のテイラーの活動については言及していない。

ここで本稿の目的にもどるが、本稿は、レッドヘッドがいうところの第 2 の研究傾向の方向をとる。筆者は、まずテイラーの最初の政治実践であるハンガリー難民支援からニューレフトにいたる活動と思想を扱う計画であり、この点でレッドヘッドやスミスの研究で解明されていないところに焦点をあてる。さらにカナダに帰国して以降のテイラーについては、別稿において、社会民主主義的な政策を提案する中で参加民主主義をどのように論じたのかという視点から『政治の形態』（*The Pattern of Politics*）⁶⁾ を扱うつもりであり、この点でも、レッドヘッドとは違った角度からテイラー政治哲学を探究する。

筆者は、まずテイラーの最初の政治実践であるハンガリー難民支援と彼の問題関心についてとりあげ、次にニューレフトの活動と理論について探求し、その後のカナダの政治と関連して形成される政治理論について研究しようとしている。本稿は、その研究における最初の一部であり、テイラーの最初の政治実践であるハンガリー難民支援とその中でテイラーの論文について扱う。

テイラーはハンガリー難民支援活動ののち 1950 年代末にニューレフトの指導者として活動し、理論雑誌『ユニヴァーシティーズ・アンド・レフト・レビュー』（*Universities & Left Review*）⁷⁾ を創設して、政治的な諸論文を発表する。この雑誌は、後に『ニュー・レフト・レビュー』（*New Left Review*）⁸⁾ に発展する。テイラーの指導したニューレフトは、同時代の日本でも福田歓一などに注目されていた。理論的には、スターリニ

5) Nicholas H. Smith, *op.cit.*, p.172.

6) Charles Taylor, *The Pattern of Politics*, McClelland and Stewart, 1970.

7) *Universities & Left Review* は、1957 年に創刊され、1959 年までの間に 7 巻発行された。

8) *New Left Review* は 1960 年に創刊され、現在も継続している。

ズムを激しく批判しつつも、初期マルクスについての新しい解釈を行い、民主主義と調和するソーシャリズムを探求した。

テイラーは、1961年にカナダに帰国した後も、ニューレフト運動の課題を引き継いで政治的な実践活動を継続する。カナダの政党は「新民主党」であり、テイラーはこの党の副党首であった。この党は当時のカナダの既成政党を批判し、政府主導の社会民主主義的経済改革を訴えている。テイラーは同党からカナダ国会議員選挙に4度立候補し、いずれも落選する⁹⁾。これらのテイラーの一連の活動および研究は、彼の第2の著作である『政治の形態』へと結実していく。この著作は、豊かな政治参加を基礎とする民主主義の充実と、大企業の独裁になっていた当時の資本主義経済を批判するものであった。

本論文の目的は、このようなテイラーの社会民主主義の源泉を、彼の最初の政治活動であるハンガリー難民に対する人道支援を手がかりとして、発見することである。

テイラーのハンガリー難民支援については、スミスが「1956年10月にソ連がハンガリーへ侵攻するとすぐに、テイラーはイギリスを離れ、ウィーンでハンガリー学生の難民とともに6か月過ごした」と述べている¹⁰⁾。また中野剛充はテイラーが「ハンガリー非合法地下大学の援助なども行っていた」と書いている¹¹⁾。

しかし従来の研究では、これ以上のことは明らかにされていないので、本稿は、彼の活動の内容をさぐり、そこから社会民主主義的ヒューマニストとしてのテイラーの特徴を引き出す。

本稿の概要

本稿は（1）と（2・完）の2本で成り立つ。まず（1）と（2・完）を合わせた本稿の全体の概要について述べる。

テイラーのハンガリー難民支援について明らかにするために、本稿は4点について述べる。第1に、テイラーがハンガリー難民についてどの

9) なお、テイラーはその後もカナダ政府の委嘱による多文化に関する委員会活動をしたり、世界各国や諸民族を訪問するなどの活動をしている。

10) Nicholas H. Smith, *op.cit.*, p.13.

11) 中野剛充『テイラーのコミュニタリアニズム』勁草書房、2007年、iv頁。

ように考え、どのような支援活動を行ったのかについて論じる(第1節)。第2に、テイラーは、ハンガリー難民の状況と格闘するなかで、その原因を作り出したソ連共産党とハンガリー共産党のスターリニズムの脅威を実感し、これを本格的に批判することになるのだが、その内容を検討する(第2節)。

第3に、当時の東西冷戦構造の状況下において、テイラーが新たなハンガリーの将来像をどのように描いたのかについて述べる。テイラーは、アメリカ合衆国の政府もイギリス政府も、スターリニズムの独裁に対して正面から対抗しようとしていないことを発見する。その結果、当時の冷戦構造における東の共産党を批判するだけでなく、西の資本主義国家も批判する方向性を獲得する。テイラーは、いわば第三の道を採用するのだが、これについて述べる(第3節)。

第4に、ハンガリーとはもともと深い関係のなかったテイラーがなぜ身の危険をおかしてまで難民支援活動を行ったのかという問題について検討し、まず、テイラーが同時代の政治に対して強い人道的関心を持っていたことを明らかにする。ここで人道的関心というのは、困難な状況にある他者に対して、自己の不利益を覚悟してでも救済にあたる情熱のことである。この情熱は、まずはハンガリー難民に向けられており、本稿ではこれを扱う。さらに、テイラーが難民支援活動を行ったさらなる動機を探るために、彼にとっての政治哲学と道徳の関係について明らかにする(第4節)。

以上の4点が本稿全体の内容である。そこで、本稿(1)においては、これまで述べた内容のうち、第1と第2について述べる。つまり、ハンガリー難民に対するテイラーの人道支援の具体的内容について論じたいので、彼がスターリニズムをどのように批判したのかを検討する。

本稿の(1)と(2・完)において明らかにするテイラーの実践的活動や思想は、その後のテイラーの理論活動に発展していくことになる。筆者はこれについては後の別稿で論じるが、ここでその展望について簡単にふれておく。彼は、ハンガリー難民支援からイギリスに帰ってのち、ニューレフトの理論的運動体を創設する。そのときテイラーは、本稿で述べるところの、第1にスターリニズム批判、第2に東西冷戦構造批判、第3に人道主義を、ニューレフトの理論的支柱とする。

第1に、スターリニズム批判は、従来の共産党に対する批判およびマルクス主義に関する理論的検討へと発展する。従って、労働者の解放といっても、当時のソ連共産党に指導された諸国の共産党が考えていたような革命を想定していたわけではない。あくまでも民主主義体制の中での労働者の地位の改善を目指したものである。第2に冷戦構造批判は、特に英米の資本主義体制の批判に発展する。第3に、彼の人道的情熱は、次には資本主義社会における労働者に向けられていき、初期マルクスの理論を生かしながら、労働者の解放の方向を論じることになる。このような彼の理論活動の始まりであるハンガリー難民支援について論じるのが本稿の課題である。

第1節 テイラーのハンガリー難民支援活動

テイラーは1957年（26歳）の論文「移民の政治」（The Politics of Emigration）において次のように述べている。

最後の銃撃（the last shot）後の2か月の間で〔1956年11月と12月に〕、20万人の難民が来た。彼らのほとんどは、多くの若い学生、エンジニア、技術者、高校の教師であり、彼らは国境をこえてやってきた。彼らはハンガリーの人口の2パーセントに相当した。彼らの中には、多くの〔共産党〕幹部（cadres）もいた。その幹部は、経済発展の速度を押し上げるために体制によって精神的に動員されてきた人々であった。殺害され、国外に追放された人々は言うまでもなく、その損失は、純粋に経済的な用語では、計り知れない¹²⁾。

12) Charles Taylor, "The Politics of Emigration", *Universities & Left Review*, Summer 1957, Vol.1 No.2, p.75. (以下PEと略記する。) なお本文中の〔 〕は筆者の挿入である。このテイラーの論文は、彼の活字論文としては、管見の限りでは、彼の生涯で2本目のものである。このことは、難民や移民に関する彼の関心が、彼の研究の開始においてきわめて重要なものであったことを示している。テイラーがこの論文に記した「20万人」という難民の数は、今日の研究に照らしてもほぼ正確である。たとえば、ブライアン・カートリッジ Bryan Cartledgeによれば、11月4日、ハンガリー難民の波が、運べるだけの個人的な所有物を持って、あるいは手押し車を押して、オーストリアとユーゴスラヴィアの国境への道を埋め尽くし、12月中旬までに、20万人をこえるハンガリー人、すなわち人口の2%が、国外へ避難したという。(Bryan Cartledge, *The Will to Survive* : A

ここでテイラーが述べていることは、第1に「1956年の11月から12月」にかけて「最後の銃撃」があったこと、第2に「20万人の難民」が発生し、その難民の中にハンガリーの指導者が含まれており、この人たちの国外流出はハンガリーにとって大きな「損失」であったことである。テイラーが直面した第1の「最後の銃撃」は、ハンガリーとソ連の共産党による市民弾圧のことである。その結果、第2の「20万人の難民」が発生する。そこで本節では、テイラーの思想と難民支援活動の意義を考察するために、彼が直面した当時の時代状況をふまえながら、この2点について順に述べる。

(1) 最後の銃撃

話は、第2次世界大戦直後までさかのぼるが、この大戦後、権力を確立したハンガリー共産党は、ソ連共産党に従属して一党独裁体制をしいていた。ヴィクター・セベスティン Victor Sebestyen の研究によれば、1945年から1956年7月まで11年間にわたってハンガリー共産党の第1書記であったマーチャーシュ・ラーコシ Mátyás Rákosi は「スターリンの最良の弟子」(Stalin's best pupil) と呼ばれた。ラーコシはスターリンがソ連で行った全てのことを「模倣」(copy) したという¹³⁾。

History of Hungary, Hurst & Company, 2011, p.458.)。さらにセベスティンによれば、ロシアの戦車が市民の運動を粉砕するためにブタペストに侵攻した朝に、その人口移動は少しずつ始まり、数か月以内に18万人の人々が去って行ったという。彼らは、若くて、エネルギーがあり、よく教育された、大志を抱いた人々であり、彼らの欠如はハンガリーにとって重大な問題をもたらしたとされている。このようにみえてくると難民の人口は18万人から20万人であっただろうと推察される。(Victor Sebestyen, *Twelve Days : Revolution 1956 : How the Hungarians Tried to topple their Soviet Masters*, Phoenix, 2006, p.280.)。さらにテイラーはハンガリーの優秀な者たちが流出したと述べているが、これは、ラースロー・リッター László Ritter の言葉を借りれば、ハンガリーからの難民の流出は、「頭脳流出」にほかならなかったということであった (Erwin A Schmidl & László Ritter, *The Hungarian Revolution 1956*, Osprey Publishing, 2006, pp. 29-30.)。実際に、ピーター・I・ヒダスによれば、1956年と1957年初頭に、ハンガリーにおける「中等教育を終えた人々の人口」の約20%が「西側諸国」に脱出している (Peter I. Hidas, "The Hungarian Refugee Student Movement of 1956-57 and Canada", *Canadian Ethnic Studies*, 1998, Vol.30 Issue 1, p.19.)。

13) Victor Sebestyen, *op.cit.*, pp. xx, 27. たとえば、教育システムはソ連モデルに変更され、ロシア語は唯一の外国語として子供たちに教えられ、国旗も変更された。国旗は、従来の赤、白、緑の3色は維持されたが、19世紀の革命後デザインされた紋章が、ソ連の金槌と鎌に変えられた。国民の祝日もロシアの祝日

ハンガリー共産党は、一党独裁体制を絶対的なものにするために、政治組織を強権的に支配していた。ハンガリー共産党がロシアのレプリカとして持っていた組織のうち最も恐れられたものがハンガリー「秘密警察」(Államvédelmi Osztály (AVO): State Security Department) である¹⁴⁾。

秘密警察の市民弾圧は、次第に凶暴になるのだが、とくに1940年代の後半から、秘密警察の標的に変化があったという。すなわちこの頃、その標的が、コミュニスト外部の敵から、コミュニスト内部の敵へと変わる¹⁵⁾。

セベスティンの研究では、ハンガリー共産党の一連の粛清は、国家による「恐るべきテロ」(the Great Terror) であるとされている。この国家テロは、その後3年以上続いたという。その人口がわずかに1000万人

に従うように変更された。さらにラースロー・リッターらの研究によれば、教会、とりわけカトリック教会は、抑圧の絶好のターゲットとなった。ヨーゼフ・ミンツェンティ József Mindszenty 枢機卿は逮捕され、1949年に「反逆罪」のため終身刑の判決を受けた。ブタベストでは、ヒーローズ・スクエア (Heroes' Square) の南東にある「レグン・マリアン教会」(the Regnum Marianum church) が取り壊され、その場所に巨大なスターリン像が建てられた。(Erwin A Schmidl & László Ritter, *op.cit.*, p.6.)

14) この秘密警察は1948年に「国家治安機構」(Államvédelmi Hatóság (AVH): State Security Authority) になり、これは秘密公安警察や治安部隊も包含していた。しかしハンガリーの市民たちは、1948年以降も、これを秘密警察と呼び続けたので、本章でも秘密警察と呼ぶことにする。この秘密警察は、東ヨーロッパにおける最も残酷な効率性を誇っていたといわれる。共産党が秘密警察を「支配」しており、秘密警察の任務は「共産党への反対を除去すること」であった (Erwin A Schmidl & László Ritter, *op.cit.*, pp.6-7; Victor Sebestyen, *op.cit.*, pp.28-29; Miklós Molnár translated by Anna Magyar, *A Concise History of Hungary*, Cambridge University Press, 2010, p.300; Bryan Cartledge, *op.cit.*, p.417.)。

15) 弾圧の標的が、コミュニスト外部の敵から、コミュニスト内部の敵へと変わった原因は、1948年の冬から1949年にかけて、冷戦が、社会主義陣営の内部で勃発したと理解されるようになったからである。たとえばユーゴスラヴィアの指導者であったヨシップ・ブロズ・チトー Josip Broz Tito は、ソ連共産党と一線を画して、社会主義に至る様々な道があると言い、彼自身を「ナショナル・コミュニスト」と呼び、「非同盟」としてのユーゴスラヴィアの未来を夢見ていた。これが、スターリンの神経を逆なです。 (Victor Sebestyen, *op.cit.*, p.38.) そこでスターリンは、コミュニストの団結に裂け目がないことを示すために、ソ連の衛星諸国に「チトー主義者のトロツキー派のスパイ」の「巣窟」に対する粛清を命令した。これが、数年の間に、全ての東ヨーロッパで粛清の嵐を生みだす。ハンガリーのラーコシは、チトーに対する戦争のためのハンガリーの大隊を提供することを進んで申し出たが、スターリンはその考えを拒否したという。だからラーコシは、ハンガリーにおいて最も劇的な見せ物裁判を行うことで自己宣伝を行おうとした。その見せ物裁判の典型こそ、のちに述べる「ライク裁判」である。これが何千人もの犠牲者を生んだ本格的な粛清の始まりであった。(Ibid., p.39.)

にも満たない小さな国のハンガリーで、1950年から1953年の間に130万人以上の人々が起訴され、裁判を受け、その半数が投獄された。さらに投獄されることもなく即座に処刑された人も2300人以上になったという¹⁶⁾。

さらに1950年には85万人いたハンガリーの共産党員のうち、ほぼ半数が、拘置所、強制労働収容所に入れられ、3年後に追放されるか、あるいは死亡した。共産党内では、誰もが疑われ、その役割が、死刑執行人から犠牲者へとめまぐるしく変化したという¹⁷⁾。

しかしソ連では1953年にスターリンが死亡し、フルシチョフがスターリン批判を行うソ連共産党第20回党大会が1956年の2月に行われている。その後もハンガリーに対するソ連の支配と弾圧は続くのだが、スターリンに隷属していたラーコシは1956年にソ連の力で引退させられ、共産党の第1書記はエルネー・ゲレー Ernő Gerő にかわる。

このころから独裁に対する市民の不満は次第に表面化してくる。のちに述べるように、ラーコシによる弾圧の犠牲者であるライクの国葬が、彼の処刑後7年目にあたる1956年10月6日に行われ、粛清の事実があきらかになるにつれて、共産党を批判する市民の怒りが大きくなる。市民は、同年10月23日の午後にブタペストで20万人の平和的デモを行い、民主主義を要求した。しかし同日の夜には武装蜂起があり、ハンガリー共産党は統治能力を失う。共産党指導部はソ連共産党に救済を求め、ソ連軍は即座に介入する。ソ連軍の弾圧は続き、11月初旬には市民との対立は深刻になり多くの犠牲者が出る。市民たちの中にはハンガリーを

16) しかもこの他に、いつわりの罪で逮捕され、裁判を受けることなく投獄された人たちは推定5万人になる。当時は3つの収容施設があり、そこには、4万人以上の収容者がいたとされている。さらに適切な法的手続きなしに1万3000人以上の人たちが「階級の敵」という烙印をおされ、ブタペストや他の町を離れるよう強制され、過酷な監督の下で、農場でひどい労働をするよう強制された。彼らの中には、それまでの貴族、紳士階級、以前の役人、工場所有者、上級の市民奉仕者なども含まれていた。共産党は、これは「帝国主義者の興隆と階級闘争の激化という事態において」不可避であると説明した。しかし、共産党幹部の本当の目的は、豊かな者をその土地や家屋から追い出し、その財産を共産党幹部のものにすることだった。(Ibid., p.41; Erwin A Schmidl & László Ritter, *op.cit.*, p.7.)

17) Victor Sebestyen, *op.cit.*, pp.41-42. しかも共産党の幹部はこれほどの暴虐をしてもなお満足することはなかった。共産党第1書記ラーコシの兄弟であり共産党の宣伝・扇動部門の上級役人であったゾルターン・ピロア Zoltán Biróha は、この「国にはまだ約50万人の敵の分子」がいると考えていたという。

脱出する選択をする者もあり、これが膨大な難民となる¹⁸⁾。

しかもハンガリー共産党は難民を認めていた面もある。セベスティンによれば、1956年の11月から12月の第1週まで、ソ連政府とハンガリーのカーダール体制は、出国に関する規律を「ゆるめていた」という。ロシアの軍隊は、あたかも潜在的な「トラブル・メーカー」が去ることを望んでいたかのように、この一定期間、オーストリアとの国境の大部分を警備員のいない状態にした。そこで何千人もの人が、国を単純に歩いて出て、あるいは国境近くまで電車に乗ったという¹⁹⁾。

（2）難民の発生

前に引用したテイラーの論文「移民の政治」における第2の論点である難民の発生であるが、たとえ難民が発生したとしても、西側諸国が、これに適切に対応していれば、テイラーのような、直接に何の関係もない民間人が支援活動をする必要はなかったかもしれない。あるいは活動が必要であったとしても国家による支援に対する補助的役割を担うにすぎなかっただろう。

当時は冷戦の時代であり、アメリカ合衆国をはじめとする西側諸国は、東側と強い緊張関係にあった。もし、西側諸国が、ソ連とハンガリーの共産党を強く批判してソ連の侵攻を停止させ、ハンガリー難民の救済を適切に行っていれば、事態の展開は異なっていたであろう。この点についてテイラーは次のように述べている。

政治的西洋の全ての指導者たちが、難民の移住を助けることを切望したわけではなかった。アメリカ政府は、難民キャンプの整備を寛大に支援したが、移住は別の問題であった。…ワシントンからは、副大統領が現地を訪問した。…しかし、議会の孤立主義者たちは、〔難民に〕関心を持たなかった。…3か月間の苦渋を経て〔移民の臨時的受け入れ政策は〕4月1日に突然に、警告なしで、停止され、

18) Miklós Molnár, *op.cit.*, p.310; Bryan Cartledge, *op.cit.*, p.443; リトヴァーン・ジェルジュ『一九五六年のハンガリー革命』現代思潮新社、2006年、117-123頁。

19) Victor Sebestyen, *op.cit.*, p.280.

そして国境はぴったりと閉ざされた。・・・〔政治家の多くは、ハンガリー問題を〕世界戦略の観点において考えてきたのであり、この観点からすれば、相対的に少数の難民の運命など、ほとんど重要ではなかった²⁰⁾。

ここでテイラーは、第1に西側諸国がハンガリー難民支援、特に難民受け入れには熱心ではなかったこと、第2に特にアメリカ合衆国の議会議員が消極的であったこと、第3に、難民支援がないがしろにされたのは国家利益が優先されたからだと論じている。第1の点であるが、テイラーは、西側諸国が自国の利益を優先してハンガリー事件に介入しなかったばかりか、事件後の難民の受け入れに積極的ではなかったことを批判して、「政治的な西側諸国の全ての指導者たちが、難民の移住を助けることを切望したわけではなかった」と述べている²¹⁾。

第2に、テイラーによれば、アメリカ合衆国政府は「難民受け入れ」に消極的であった。特に難民に対する支援の姿勢は、ドワイト・D・アイゼンハワー Dwight D. Eisenhower 大統領よりも議会の方がさらに消極的であったと指摘している。「議会の孤立主義者」(the Congress isolationists) たちが難民の受け入れに消極的であり、彼らは「なぜ既存の失業者数を増加させるのか、なぜ自由の土地への移住への割り当て人数についての神聖な原則を破るのか、難民たちが共産主義者でないと誰が言うことができるのか」、このような点を問題にしたとされている。大統領と議会の間での「一時しのぎ」の移民「受け入れ政策」も、3か月の攻防によって終了して、4月1日には受け入れが終了する²²⁾。

第3に、テイラーは、「西欧からだけでなく、アフリカ、日本、インド、香港から」も支援資金が寄せられたとしながらも、国家が支援する場合には「世界戦略」の観点で支援する面があり、この観点からすれば、相対的に「少数の難民の運命は、さほど重要ではなかった」と西欧諸国を批判している²³⁾。

20) PE, p.76.

21) PE, p.76.

22) PE, p.76.

23) PE, p.76.

テイラーの議論は、現代のブライアン・カートリッジ Bryan Cartledge の研究でも裏付けることができる。カートリッジによれば、西側諸国は、冷戦のバランスを崩すことには慎重であり、結局、英米の政府は、ソ連との対決を避ける道を選んだ。モスクワにいたアメリカ大使は、ソ連軍の弾圧が行われていた10月30日にソ連政府に書簡を送り、ソ連の安全を脅かすために、東ヨーロッパで起こっている出来事を利用する意図はないと伝えている。アメリカ合衆国とこれに追従したイギリスは、ソ連軍のハンガリー侵攻を非難するどころか、ソ連軍の暴虐に保証書を与えていた²⁴⁾。

しかもアメリカの宣伝機関が「自由ヨーロッパ・ラジオ放送」(Radio Free Europe)を通じて、ハンガリーの青年たちに、「自由の力」による「囚われの民」の「最終的な解放」を信じるよう奨励している。アメリカ合衆国のメッセージは、国家テロに対して今すぐにたたかえというものではなく、重要な事は将来の最終的な解放であり、今は権力に服従せよと示唆するニュアンスを持っていた²⁵⁾。

さらに、ミクローシュ・モルナール Miklós Molnár が述べるように、ハンガリーにおける1956年の「最初の反全体主義革命」は、ソ連軍の弾圧で破壊されたが、西側諸国は、ソ連の弾圧を止めようとしなかった。西側からすれば、ソ連に対する戦争はいかなる場合においても考えられなかったのである。しかし、モルナールは、西側諸国が、軍事的圧力以外に、モスクワに妥協を迫る他の手段、つまり外交手段、多数国参加の手段、経済的手段などを使う方法もあったはずだと述べている。だが西側諸国はこれを行わなかった²⁶⁾。

たしかに西側諸国にも弁明の材料がないわけではない。ハンガリー事件と同年同月である1956年10月末にスエズ危機が発生している。しかし、テイラーは、このスエズ危機こそ、西欧諸国がハンガリー難民支援を回避するための口実になったことを次のように指摘している。

「スエズ危機は、重要な瞬間において、ハンガリーへの支援を、確

24) Bryan Cartledge, *op.cit.*, p.455 ; Erwin A Schmidl & László Ritter, *op.cit.*, p.27.

25) Bryan Cartledge, *op.cit.*, p.455 ; Erwin A Schmidl & László Ritter, *op.cit.*, p.27.

26) Miklós Molnár, *op.cit.*, p.321.

かに弱めた」²⁷⁾。

イギリスとフランスは、スエズ運河を国有化したエジプトの指導者ナセル Colonel Nasser を打倒しようとして、10月29日に、イスラエルとともにエジプトに侵攻する。アメリカはこの動きに反発し、大西洋をはさんだ両国間に緊張が起きている。ソ連軍がハンガリーに2度目に軍隊を派遣した10月30日、国連の安全保障理事会は、ハンガリー問題ではなく、スエズ問題を議論するために緊急会議を招集した。しかし、たとえこのような西側の内的な緊張があったとしても、英米諸国がソ連のハンガリー侵攻を止めなかったことによって、ハンガリーの市民が東西のいかなる国家によっても保護されないところに置かれたことは否定できない²⁸⁾。

(3) テイラーの難民支援活動

結局、テイラーのような民間人による自主的な支援のみが、ハンガリー難民にとっての援助となる。まさに「20万人の難民」を救済するために、1956年の11月初旬、テイラーはハンガリーに入国しようとする。しかしこれができなかったため、彼はオーストリアのウィーンに行く。ここで、難民支援のために「世界大学支援機構のカナダ支部のための現地事務所」(a field office for World University Service of Canada) を創設する。

テイラーは、何百人ものハンガリー難民がカナダやアメリカに再移住するのを手伝った。前述のウィーン「現地事務所」は、難民となったハンガリーの学生に、住まい、輸送手段、奨学金を提供することを目的としていた²⁹⁾。さらにテイラーは1956年11月から1957年春まで、「オー

27) PE, p.76.

28) Erwin A Schmidl & László Ritter, *op.cit.*, pp.26-27 ; Bryan Cartledge, *op.cit.*, p.454.

29) Daniel Cattau, "The Engaged Philosopher ; an Interview with Charles Taylor", *Northwestern Magazine*, Fall 2008. (<http://www.northwestern.edu/magazine/fall2008/feature/taylor.html>, 2012年11月6日閲覧(以下 Interview Fall 2008 と略記する)); Charles Taylor, "What Drove Me to Philosophy", The 2008 Kyoto Prize Commemorative Lectures: Arts and Philosophy, Inamori Foundation (以下、WD と略記する。); チャールズ・テイラー「私に哲学の道を歩ませたもの」第24回(2008年) 京都賞 記念講演会 思想・芸術部門。

ストリアへのハンガリー学生を支援する団体の代表」(World University Service representative with Hungarian student refugees in Austria)を務めて活動している³⁰⁾。そのときテイラーは難民学生に対して「真の連帯意識」(a real sense of solidarity)を感じたと述べている³¹⁾。

のちにテイラーは、スターリニズムをはじめとするあらゆる権威主義的統治を理論的にも批判することになるが、テイラーが直面したハンガリー事件こそ、テイラーにおける独裁の原体験となった。

では、テイラーは、具体的にはどのような活動をしたのか。ピーター・I・ヒダス Peter I. Hidas によればオーストリアにおいてテイラーは、カナダ大使館の職員であったゴードン・コックス Gordon Cox と、カナダのシティズンシップ・移民大臣であったJ・W・ピッカースギル J.W. Pickersgill と協力して支援活動を行った。当時、カナダ政府は、ハンガリー難民の動きに関心をほとんど示さなかった。だがピッカースギルは、約 1000 人の学生の入国を許可しようとして大きなエネルギーを注いだとされている³²⁾。

ウィーンでは、ゴードン・コックスが「ハンガリー難民支援運動プログラム」を熱心に支持して懸命に働き、ピッカースギルと連絡をとった。彼は、学生のために、1957年1月の飛行機の予約を始めた。約 100 人のエンジニアと鉱山学の学生が、カナダに向けて出発するためにウィーンの施設に集められた。コックスは 850 人の林業学部の学生を、トロント行きの船「アローサ・スター号」(Arosa Star) に乗せようと計画した。ウィーンで、カナダに行くことを希望する学生は、「世界大学支援機構」(W.U.S.) のカナダ支部のテイラーに申し出て、テイラーは彼らがコックスに接触できるようにした。テイラーは、1956年に約 500 人のハンガリー人をカナダ入国のために「登録」し、コックスは、急いで輸送の準備をした³³⁾。

テイラーやコックスおよびピッカースギルの努力は非常に大きな成果をもたらす。ヒダスも述べているように「彼らの運動は非常にユニーク

30) PE, p.75.

31) Daniel Cattau, Interview Fall 2008.

32) Peter I. Hidas, op.cit., pp.19, 29.

33) Ibid., p.29.

な成果を生み出し」た³⁴⁾。彼らの運動を端緒として、ハンガリーの学生たちの多くが、カナダやアメリカなどの諸国に受け入れられることになる。その数字は、約1年後の1957年10月までに、カナダの958名、アメリカの1726名、オーストリアの1224名をはじめとして、合計7948名になっている³⁵⁾。

(4) 難民に対するテイラーの懐疑と受容

強い正義感に突き動かされてウィーンにまでやってきたテイラーは、彼自身と同じように、高い理想や志を持つハンガリー難民を支援しようとしていた。たしかに相対的に少数であるとはいえ、政治的迫害から逃げてきた難民を発見しており、テイラーは次のように述べている。

相対的に少数の人々が、実際に政治的迫害から逃げ、国外追放の恐れから逃げていた。その少数の人々は、ほとんど何も持たずに、凍りついた、平らな森で覆われた国境地方をわたり、ロシアとハンガリーの巡回を避けていた。彼らはほとんど、1956年11月から12月初めに、やってきた。……

……学生の中には、厳密な意味での政治難民も多くいた。多くの人は、革命における指導者や組織者であった。彼らの仲間、最初に逮捕される人々の中にいたのであり、かろうじて、復讐心に燃えた政治警察(AVO)から逃れてきた。労働者の息子たち、専門職の人々、共産党のメンバーである人やメンバーでない人たち、彼らは皆、共に闘い、組織してきたのであり、追放の身で、彼らと共に自発的な統合性(unity)を形成した³⁶⁾。

ここで述べられている政治難民とは、ハンガリー共産党の絶対的支配に対抗しようとしていた人々であり、それゆえに当時恐れられていた政治警察に追われていた人々である。彼らはかろうじて迫害を逃れ、独裁

34) Ibid., p.19.

35) Ibid., p.29.

36) PE, p.75.

に対抗することのできる新たな組織をつくろうとしていた人々である。ところがテイラーは、このような政治難民の背後に、政治的に迫害されたわけではない難民を発見して、次のように述べている。

彼らの背後には、もううんざりしたので去る人々の波、アメリカに行って車のある生活をする機会を得たいから去る人々の波、あるいは単に誰もが出ていくように思えたから出発する人々の波があった³⁷⁾。

テイラーは、政治的迫害から逃れるわけではなく、単に「アメリカに行って車のある生活を」したいから去る人々や、自らの意思で行動しているというよりも人の流れに任せて出国した人々に対して、果たして「これは政治難民 (a political emigration) なのであろうか」と自問している³⁸⁾。

この疑問は、テイラーが、自らの行動に戸惑いを覚えていたことを示している。ハンガリーを出ていく人々の中には、前に述べたように単にアメリカで物的に豊かな暮らしをしたいから去る人々や、あるいは「冷戦のプロパガンダ闘争」に惑わされた人々もおり³⁹⁾、テイラーはこの人々たちを支援する活動の意味について、いったん戸惑いを見せたのであるが、この人たちのハンガリー脱出については、別の意味を発見している。

テイラーは、彼らは通常受け入れられている意味において「政治難民」ではないとしながらも、「中央ヨーロッパでは、あらゆることが政治的になってきた」と述べている⁴⁰⁾。

テイラーのこの理解は、共産党の支配が個人の思想や信条や私的な生活のありかたにまで及んだことを意味している。テイラーは、これから脱却したいと思うことによる逃亡もまた、政治的ではないかと思うようになり、ハンガリーの学生の実例を挙げて以下のように述べている。

37) PE, p.75.

38) PE, p.75.

39) PE, p.75.

40) PE, p.75.

海外へ向かっていた学生の J.J. さんは、次のように尋ねられた。『もし1日で物事が変わったら、ハンガリーに戻りたいと思ったことはありますか』。答えは明白だった。『・・・私は平和に生きたいだけなのです』。彼女は、・・・何らかの政治的信条を持っているから去るのではなく、自らが望めば、いかなる信条も持たないでいることができるようになりたかったのである。移住は、非政治的である権利 (the rights of the apolitical) への衝動であった⁴¹⁾。

ここでテイラーが強調していることであるが、彼らは「何らかの政治的信条をもっていたから去るのではなく、彼らが望めば、いかなる信条も持たないでいることができるようになりたかった」から去るのである⁴²⁾。だから「非政治的である権利への衝動」はまさに自由への衝動である。彼らは、個人の内面や生活まで共産党の政治権力によって支配される政治体制を拒否しているのであり、自由な政治体制を求めて移住しようとしている。これは、まさに政治的移住であり、テイラーは、かれらもまた「政治難民」であると述べている。

第2節 スターリニズム批判

テイラーが支援したハンガリー難民は、共産党による圧制の被害者であった。だから彼の難民支援の活動は当時の共産党の政治と思想を否定する活動であり、テイラーは、しばしば共産党に対する怒りに満ちた議論をしている。

そこで本節では、テイラーがスターリニストの共産党に対して、いかに強い批判意識を持っていたかを見る。特にスターリニストによる粛清の重要事件であるハンガリーのライク裁判とソ連のモスクワ裁判についてのテイラーの批判を取り上げる。

41) PE, p.75.

42) PE, p.75.

（1）スターリニズムの不条理

まずテイラーのスターリニズム批判であるが、テイラーは1957年に、論文「社会主義と知識人」（Socialism and the Intellectuals）の中で次のように書いている。

両陣営・・・は以下のように結論づけた。自由主義経済の傾向を破壊したとして批判する者たちは、ソヴィエト連邦内で追放された数百万人に対する責任がある⁴³⁾。

この文の中にある「両陣営」というのは、共産党指導部内のスターリニスト主流派と、党内の批判的・反主流派の「両陣営」である。この「両陣営」は経済政策をはじめとして対立があったのだが、最終的にはスターリニストの勝利に終わる。そのとき、スターリニズムに適応した者は生き残る。したがってソ連共産党の指導部内には、スターリニストの陣営とこれに適応した陣営の「両陣営」があるといわれている。

スターリニズムに適応できなかった「自由主義経済の傾向」を持った者たちがいたとされているが、これを仮に「自由派」とすると、この「自由派」の人たちは、自分たちの「自由主義経済の傾向」を党指導部が「破壊した」と考える。この「自由派」の人たちこそ「批判する者たち」である。

「ソヴィエト連邦内で追放された数百万人」とあるが、これはスターリニストによってシベリアなどに追放され抑留された人たちである。テイラーは、もちろん、この「数百万」の人たちに対する責任はスターリニズムにあると考えている。ところが当時のソ連共産党の指導部の「両陣営」によれば、「自由主義経済の傾向」を持った人たちこそ共産党への裏切り者であり、この裏切りこそ、自分たちが追放された原因であり、その責任は自分自身にあるとされている。このようにテイラーは述べている。スターリニズムが行った粛清や追放の責任を、その被害者のせい

43) Charles Taylor, "Socialism and the Intellectuals", *Universities & Left Review*, Summer 1957, Vol.1 No 2, p.19. (以下 SI と略記する。)

にする。のちにテイラーが言う「不条理」(absurdity)である⁴⁴⁾。

共産党の絶対的な権力者による、このような「不条理」な支配を象徴する事件の中に、ハンガリーのライク裁判とソ連のモスクワ裁判があり、テイラーは、これらについて厳しく批判している。

(2) ライク裁判に対する批判

スターリニズム批判は、テイラー自身が救済した被害者を生み出したハンガリーの共産党批判でもある。テイラーは、次のように述べている。

[共産党によれば]ライク裁判(the Rajk trial)の正しさを疑う人々は、新たな戦争をたくらんでいるという罪を犯している。その不条理(absurdity)は集合的ではほぼ一般的であるが、 Kommunismusはそれに加担したのだ⁴⁵⁾。

テイラーは、ここで何を言おうとしたのであろうか。「ライク裁判」とはどのようなものであり、そのどのような点をテイラーは問題にしたのだろうか。これを考えるために「ライク裁判」について、のちに、筆者の方で補足するが、これはソ連共産党とハンガリー共産党による粛清事件である。これの「正しさを疑う人々」というのは、この粛清に疑問を持つ人々のことであり、両共産党からすれば党の権力の説明に納得しない人々である。

この人々が党の内部の者であれば、彼らは党の指導部に反抗する者とみなされ、党の外的一般市民であれば、彼らは共産党の一方独裁に反対する者としての烙印を押される。この人たちは共産党指導部の絶対的な権力と一方独裁に反対し、その支配を崩す可能性をもっているから、共産党に「新たな戦争をたくらむ」者になる。ところが共産党は、自らは正義の保持者であるという独善的な価値観をもっているので、党に反抗することは「罪を犯」すことになるわけである⁴⁶⁾。

44) SI, p.19.

45) SI, p.19.

46) SI, p.19.

テイラーによれば、当時の共産党は、このような「不条理」な理解をもっていた。しかもこの理解は共産党の内部では「集合的ではぼ一般的」に共有されていた。もちろんこのような理解は個人の自由と人権を蹂躪するものである。このような不当な通念を確立して広めることに「 komunizmus は加担した」とテイラーは批判している⁴⁷⁾。

そこでライク裁判について、筆者の方で簡単に説明して、テイラーが批判しようとした実態をさぐる。ライク裁判の被告人はラースロー・ライク László Rajk である。彼は、M・フランソワ・フェイト M・François Fejtő も述べるように、戦後の共産党政権において外相も務めたことのある大物幹部であった。このライクが「チトーの反ソ連の陰謀」に加担したという罪状で 1949 年に処刑される。このときの裁判がライク裁判と呼ばれているが、これはもちろん近代的な司法手続きに基づく裁判ではない⁴⁸⁾。

ヴィクター・セベスティンの研究によれば、ラースロー・ライクは、もともとハンガリーの警察国家の主な設計者の一人であった。彼は、内務大臣として、ミンツェンティ Mindszenty 枢機卿の裁判と、教会の抑圧を巧みに立案した。ライクは、もともと強硬路線のスターリン主義者であり、すべての反対を許さなかった⁴⁹⁾。

マイクロシュ・モルナルの研究によれば、ライクは、もともと「生粋のコミュニスト」(native communist) であり、一般党員だけでなく市民からも強く支持されたポピュリストでもあった。そこで当時の共産党第 1 書記のマーチャーシュ・ラーコシ Mátyás Rákosi は、ライクを権力闘争のライバルと考え、ライクを攻撃しなければならなかった。これが

47) SI, p.19.

48) François Fejtő, translated by Daniel Weissbord, *A History of the People's Democracies: Eastern Europe since Stalin*, Praeger Publishers, 1971, p.6; リトヴァーン・ジェルジュ、前掲書、38 頁。

49) ライクは、「誰も羅針盤を必要としており、私の羅針盤はソ連である」と述べたとされている。ライクは、ユーリア・フォルデイ Júlia Földi と結婚し、ライク夫婦は、当時のコミュニストがあこがれていた魅惑的なカップルであった。しかしライクの素晴らしい風貌と名声は、共産党第一書記のラーコシを苦しめた。ラーコシは、ライクを、「潜在的なライバル」と見ていた。だからラーコシはライクを、「粛清」の標的として選び、これについてスターリンに相談し、スターリンもそれを承認していたという (Victor Sebestyen, *op.cit.*, p.39)。

裁判の隠された目的であった⁵⁰⁾。当時の起訴状の記録によれば、ライクは、1949年5月にブタペストで秘密警察によって逮捕された⁵¹⁾。ライクと彼の仲間は、ハンガリーの民主的國家秩序を暴力によって転覆させる目的をもつ組織を立ち上げ、ハンガリーを帝国主義者の衛星国にしようとしており、当時ソ連と対立していたユーゴスラヴィアの軍事支援によって、この目的を実現しようとしているとされていた。

スターリンは、ソ連「秘密警察」の重要幹部であったフォイオドール・ビールキン Fyodor Bielkin を頂点とする30人の尋問チームをハンガリーに送り込んだ。ライク裁判はスターリンの直接指揮下にあるソ連の秘密警察が、ハンガリー共産党の幹部も使いながら行われたものであり、スターリニズムそのものであった⁵²⁾。

ブライアン・カートリッジの研究によれば、ライクは、何日にもわたって昼も夜も尋問と拷問を受けているにもかかわらず、彼の無実を主張し続けたという。そこでラーコシは、当時のハンガリー内務大臣でありライクの親しい友人であったヤーノシュ・カーダール János Kádár を利用する。カーダールは、ラーコシの指令の下で、ライクに対して、無罪判決とソ連での安全な国外生活を与えると述べ、そのかわり「党のために」彼の罪を自白するよう迫る。ライクは、最終的には親友カーダールの説得に屈服し、党に協力することに合意した。しかし、その理由の一部は、彼と一緒に逮捕された彼の妻を守るためだったともいわれている⁵³⁾。

ハンナ・アーレント Hannah Arendt もまた、ライクが「無実」でありながら、コミュニスト運動への「歴史上重要な奉公」を迫られたという記録に触れ、イデオロギーそれ自体の「空虚さ」を批判している⁵⁴⁾。たしかにアーレントが言うように、ライク裁判では、社会主義社会のあるべき姿とか、資本主義にかわる経済システムはどうあるべきかなどというような、イデオロギーの内容に関する争いは、その片鱗すら見えない。その意味でイデオロギーは空虚なものに成り下がっている。ここに発見

50) Miklós Molnár, *op.cit.*, p.303.

51) State Prosecutor's Office, *László Rajk and His Accomplices before the Peoples Court*, Budapest Printing Press, 1949, pp.5-27.

52) Victor Sebestyen, *op.cit.*, p.40.

53) Bryan Cartledge, *op.cit.*, p.425.

54) Hannah Arendt, *The Origins of Totalitarianism*, Meridian Books, Second Enlarged Edition 1958, p.495, note12.

できるのはイデオロギーを口実としたところの、殺伐とした権力闘争だけである⁵⁵⁾。ライクは全ての点において有罪とされ、1か月後に処刑される。ライクと一緒に逮捕された彼の妻であったユーリア・ライク Júlia Rajk も6年間の投獄の刑に処されている⁵⁶⁾。

以上のように、1949年のライク裁判においては、裁判の公正さや近代的司法手続きはない。スターリニストが司法権を独占して不公平な擬似裁判を行うことは、当時ハンガリーのみに限定された問題ではなかった。テイラーがライク裁判にとりわけ言及したのは、カートリッジも述べるように、ライク裁判がハンガリーとその他の中東ヨーロッパにおける一連の「見せ物裁判」(show trials)の最初の典型だったからである。ライクは、当時の共産党の幹部であったため、その裁判は当時としては最も慎重に行われたと思われるが、その後続く裁判はライク裁判よりもさらに乱暴な手続きによって行われ、あるいは裁判すら行われずに、多くの人が処刑されることになる⁵⁷⁾。

ハンガリー共産党の権力は強靱であり「ライク裁判」が虚偽の罪状による政治的な粛清であることを明らかにすることは容易ではなかった。しかし裁判の後も、ライクの妻であるユーリア・ライクは、夫が無実の罪で処刑された、と訴え続けた。ところが彼女も6年間投獄されたので、彼女が夫の名誉回復のために本格的な運動を開始するのが出獄後の

55) 結局、ライクと全ての被告は、繰り返された拷問の後で、彼らに期待されたように告白し、裁判において彼らに割り当てられた役割を演じた。まるで演劇の練習のように、何回ものリハーサルが行われたという。被告人たちは、どの「パフォーマンス」が本当の裁判なのかを、最後の裁判まで、確信していなかったとされる。1949年9月に開始された裁判は、裁判所ではなく、多くの聴衆を収容できる大きな労働組合の「講堂」で行われた。その裁判は、当時の記録によれば「人民裁判による特別な裁判」(The Special Court of the People's Court)であった。罪は、あまりにもばかばかしいものであった。ライクは、最も忠実な共産主義者であったにもかかわらず、裁判ではスパイとして扱われ「ほとんどすべての外国、主にユーゴスラヴィアやアメリカ、およびフランコのスペインのために働いた」と断言された。判決文が下されたとき裁判所の役人と聴衆全体は集合的なリズムをとった拍手によって判決に賛意を表したといわれている。(State Prosecutor's Office, *László Rajk and His Accomplices before the Peoples Court*, pp.303-306; Victor Sebestyen, *op.cit.*, pp.40-41.)

56) Bryan Cartledge, *op.cit.*, p.425. ライクをだましたカーダールは、責任ある大臣として処刑に出席するよう義務付けられた。同時代人による1つの報告によれば、ライクは死刑台の上から、カーダールを見つけて「裏切者」とさげんだという。

57) *Ibid.*

1956年である。それまでは一般市民の間でも、すくなくとも公式には、ライク裁判は正しいものであったと思われていた。

しかしユーリアの運動によって、共産党と市民の間で、それまでに処刑された多くの人たちの裁判に対する疑問が、次第に広がる。前に述べたように、すでに1956年にはフルシチョフがスターリン批判を行い、ラーコシが失脚し、ハンガリー共産党の第1書記はエルネー・ゲレー Ernő Gerő にかわり、共産党の支配力は弱っていた。そこでゲレーは、ユーリアの要請にこたえてラースロー・ライクの国葬を1956年10月6日に行うことを容認するが、これには出席していない。

ところが、ブタペストの共同墓地における、ライクの遺骨の公式の再埋葬には、何万人もの人々が参加し、体制に対する人々の「沈黙の抗議」となった。さらに、ライクと同じ裁判によって長期の獄中生活をしいられたベーラ・サース Béla Szász が、この葬儀に参加していた。彼は、意を決してスピーチを行い、当時の裁判は虚偽の罪状で多くの人を裁いたと、公然と告発するのだが、このような「ライク裁判」について、テイラーは激しく批判しているのである⁵⁸⁾。

(3) モスクワ裁判に対する批判

テイラーにとって、ハンガリーにおけるライク裁判を徹底的に批判するためには、ライク裁判の原型であるところの、ソ連におけるスターリニズムの恣意的裁判も問題にしなければならなかった。これがモスクワ裁判である。テイラーは次のように述べている。

1930年代のモスクワ裁判は、徹底的に不誠実であったが、これは〔スターリニズムの〕興味深い例を提供している⁵⁹⁾。

ここで述べられているモスクワ裁判はスターリニズムによる粛清のた

58) Bryan Cartledge, *op.cit.*, p.443; Miklós Molnár, *op.cit.*, p.310; リトヴァーン・ジェルジュ、前掲書、48-49頁。

59) Charles Taylor, "Marxism and Humanism", *The New Reasoner*, 2, Autumn 1957, p.92. (以下MHと略記する。)

めの見せ物裁判であるが、石井規衛は、モスクワ裁判が行われた1930年代後半のソ連は、おぞましい国家による「テロルの時代」であったという⁶⁰⁾。

グレイト・ギル Graeme Gill の研究によれば「国家テロ」は1936年から38年の間に最高潮に達し、無数の人が犠牲になった。犠牲者のうち、ごく一部の最も著名な人物が1936年、37年、38年の3つのモスクワ裁判の被告である。これらの裁判では、かつてスターリンに対抗した多くの指導者、ジノヴィエフ、カーメネフ、ピヤトコフ、ラデック、ブハーリン、ルィコフたちが被告となっている。彼らは、考えもつかないような罪で裁かれ、処刑された。社会のあらゆるレベルで指導的地位にあった非常に多くの者が更迭され、その結果、あらゆる社会的組織が自立した性格を失ったという⁶¹⁾。

石井規衛によれば、たしかに見せ物裁判自体は1922年からあり、目新しいものではない。しかし1930年代のモスクワ裁判の違いは、なによりもソ連社会主義を建設してきた古参党員が、被告人席に座らされたことである。ほとんどの被告人が、日本やナチズムのスパイなどと、自らの「罪」を「自白」したとされる⁶²⁾。このようなスターリニズムに対するテイラーの最も根本的な評価は次のようなものである。

スターリンの下のコミュニストの理論家たちは人間の主体性に関する弁証法的な分裂を基礎としていた。その弁証法的分裂によって、社会的条件に対する人間の創造的で知的な応答は、党の官僚に集中された。残りのヒューマニティは、非常に狭いと考えられた条件の客観的限界の内部で闘争した⁶³⁾。

ここで言われているように「社会的条件に対する人間の創造的で知的な応答」すなわち、歴史を解釈したり、経済を理解したり、将来の計画

60) 石井規衛「スターリンと社会主義体制の発展」和春樹編『ロシア史』山川出版社、2008年、334頁。

61) Graeme Gill, *Stalinism*, Palgrave Macmillan, second edition, 1998, p.31；内田健二訳『スターリニズム』岩波書店、2010年、45-46頁。

62) 石井規衛、前掲論文、336頁。

63) MH, p.93.

を立てたりする人間の「応答」のための能力は「党の官僚に集中された」。だからテイラーは、結局スターリニストだけが、歴史解釈などの能力を持ったという。「残りのヒューマニティ」すなわち党幹部以外の者たちは「非常に狭いと考えられた条件の客観的限界の内部」に監禁され、その能力は限られたものとみなされた。そこでテイラーは次のように述べる。

〔こうしたスターリニストの態度は〕歴史を判断する際の人間的限界の拒否、つまり一種の歴史的独我論 (historical solipsism) である。『アイディアは、人間が世界を理解するための手段にすぎないとは見なされない』という性格づけは、スターリンという「天才」(genius) の仕事には適用されない⁶⁴⁾。

ここでテイラーは、スターリニズムは「歴史的独我論」であると述べているが、これは、歴史を権力者が自己中心的に解釈することを意味している。結局、歴史の客観的な姿も、権力者の身勝手な恣意的理解に過ぎないのである。

さらに、一般の歴史学者であれば、あるいは市民であれば、その人の「アイディアは、人間が世界を理解するための手段にすぎない」わけであるから、歴史の「客観的傾向」が発見されたとしても、これはその人が「世界を理解するための手段にすぎない」ので、それで政治権力が人を裁く根拠にはならない。

ところが、テイラーは、「すぎないとは見なされない」と述べている。すなわち、スターリニスト官僚にとって、歴史の「客観的傾向」としてのアイディアは、党の正統派の基準となる。しかしテイラーは、この「性格づけ」すら「スターリンには適用されない」と論じる。スターリンは「天才」であり、「客観的傾向」をふくめて、あらゆる拘束から自由である。ここから絶対的な独裁がうまれたことを、テイラーは示唆している。

テイラーは、このようなスターリニズム理解を基礎として、モスクワ裁判における論理的トリックを問題にして次のように述べている。

64) MH, p.93.

革命政党は、歴史的責任について意識的でなければならない。しかしモスクワ裁判では、この意識は完全に滑稽なものに変化した。というのは、起訴の主な目的は、被告人の見解の客観的傾向についての誤った考え方を作り出すことだけでなく、客観的な反革命を犯罪的意図と等しいものと見なすことであった。裁判において歴史的責任を判断するという考え方は、歴史的判断における過ちを、邪悪な意図、つまり悪の信仰と同化させることを反映している⁶⁵⁾。

ここでテイラーは、きわめて凝縮した文章を書いているが、この文章は、スターリニズムにおける、まず2つの「誤った考え方」を指摘している。

第1に、「被告人の見解の客観的傾向」とあるが、ここにおける「客観的傾向」はスターリニストによって恣意的に決定される歴史的傾向であり「誤った考え方」である。これはもちろん共産党を掌握しているスターリニストが権力を維持するための必要に応じて、前にテイラーが述べたように「独我論的」に決定される。

第2に「被告人の見解の客観的傾向」における「被告人の見解」であるが、これもスターリニストの政治的な必要から「独我論的」に決定されるだろう。そのうえで「被告人の見解」と「客観的な傾向」は相反すると結論づけられる。これが第2の「誤った考え方」である。

ところが、仮に「被告人の見解」とスターリニストが考える「客観的な傾向」の違いがあったとしても、これは単なる歴史観の違いにすぎないだろうから、処刑の理由にはならないだろう。そこでテイラーは、スターリニストは、歴史の「客観的傾向」からの逸脱を「反革命」とみなし、この「反革命を犯罪的意図と等しいものと見な」したと述べている。ここでは、単なる見解の相違にすぎないものを「犯罪」とするために、これは「歴史的判断における過ち」であるという理解を持ち出すという。この「過ち」を「邪悪な意図、つまり悪の信仰と同化させ」る。こうしてテイラーが言うように「ソヴィエト社会は、その社会を統治した官僚の立場からのみ理解され」⁶⁶⁾て、スターリニズムの魔女裁判であるモス

65) MH, p.93.

66) MH, p.93.

クワ裁判やライク裁判が可能になったのである。

ここでライク裁判にもどって、筆者の方で付言する。フランソワ・フェイトが研究しているように、ライク裁判においては、証拠もなかったし、犯罪行為もなく、「非合理きわまる自白」があっただけである。それにもかかわらず、ライクを有罪とするために用いられたレトリックは「客観的」という言葉の用法であった。すなわち、ライク裁判の予審においては、党規律、党の路線、イデオロギーに対して若干の過ちを犯したことによって、被告が、「客観的に見れば」それと知らずに、犯罪者、敵の協力者になっており、自ら意志しないで敵の道具となっていたとされた。まさにテイラーが述べたように、スターリニストが「客観的」という用語を使った「独我論的」な判断であった⁶⁷⁾。

67) フェイトは、このようなライク裁判の予審において使用された主要な手段、おもな拷問方法、真の秘密武器は、他の共産党員に対する場合と同じように、イデオロギーをめぐる心理的なものであったと述べる。最終的に、被告たちは、党に最後のご奉公をするために屈服していった。(F・フェイト著/村松剛・橋本一明・清水徹訳『民族社会主義革命——ハンガリア十年の悲劇』近代生活社、1957年、51-53頁。)